

# 小学校国語科における説明文作成課題を通した 「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」 の育成

学籍番号 (179964)  
氏名 (井上 聡一郎)  
主指導教員 (寺嶋 浩介)

## 1. 背景と目的

次期学習指導要領では、知識の理解の質を高めることが重要視されている。そのため、次期学習指導要領第3章第一節の3では「児童が持つ知識を活用して思考することにより、知識を相互に関連付けて深く理解したり、知識を他の学習や生活の場面で活用できるようにしたりするための学習が必要となる」（小学校学習指導要領（平成29年告知）2017, p. 36）と述べている。また、現代の児童の課題にたいして『平成29年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語』（国立教育政策所2017, pp. 8-9）より、「目的に応じて、必要な内容を整理して書くこと」が指摘されていることから、児童が目的に応じて習得した知識を活用する資質・能力の育成、それに対応する言語活動の機会が必要であると考えられる。

そこで本研究では、小学校国語科の説明文に注目し、説明文作成の言語活動を通じて、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」の育成を図る。「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」とは、国語科で理解したり表現したりするために力の創造的・論理的側面の資質・能力である。この資質・能力は、小学校国語科学習指導要領の項目と照らし合わせると低学年においては「順序立てて考える力」、高学年では「筋道立てて考える力」に関連する力であり、「内容」、「文構成」の両面からこれらの資質能力の定着を評価、把握していく。またこの資質・能力を育成するために、理解の側面の一つである「説明する」という言語活動を通じて、資質・能力の育成を図り、言語活動の質を高めるとともに、全教科で「説明する」技能の基礎を築き上げることをめざした。

## 2. 研究方法

本研究では、「説明する」という行動に注目し、児童が説明する機会を充実させることで「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」が育成されると仮説立てて授業実践をおこなった。授業実践の手法として、各章単元ごとに逆向き設計理論を用いて、説明文作成のパフォーマンス課題を導入した。更に、事前・事後のテストを用いて「情報を多面的・多角的に精査し、構造化する力」の技能の変化を把握した。

## 3. 授業実践

堺市立A小学校で授業を行った。各章で報告した授業実践は以下の通りである。すなわち、第

2章では二年生を対象に国語9時間で「順序を表す言葉」を意識し、実際におもちゃを作ると動作化などを通じて、「おもちゃの設計書」の説明文作成課題を導入した授業実践の結果について報告した。第3章では、五年生を対象に国語7時間を用いて、「根拠・理由・主張」の三点セットを意識させ、身近な学校の疑問に対して筋道立てた意見文を作成する課題を導入した授業実践の結果について報告した。第4では同様の五年生を対象に国語と社会科の合科カリキュラムを10時間で授業実践の内容を報告する。ここでは、資料の扱い方や「根拠・理由・主張」の三点セットなどを用いて、社会科の内容の中で資料を用いて筋道立てた意見文を作成する課題を導入した授業実践の結果について報告した。

#### 4. 結果

第2章で報告した実践では、低学年を対象に「順序立てて考える力」の育成をめざした。そのため、設計書を作る説明文作成課題を導入し、授業設計をおこない授業実践を行った。この授業実践を通じて、単元の事前と事後において、課題に対して順序立てて自分の考えを説明することができる児童の人数が有意に増加した。

第3章では、高学年を対象に「筋道立てて考える力」の育成を目指し、意見文を作る説明文作成課題を導入し、授業設計を行った。すると、議題に対して筋道立てて自分の考えを表現することができる児童の人数が増加し、記述の内容にも充実が見られた。また、第4章では、第3章に続いて授業実践を行ったところ、双括型の文構造を用いて、筋道立てて自分の考えを表現する児童の人数が増えた。さらに、国語科の学びを社会科で生かす中で、資料を用いた説明が行うことができる児童の人数が増加した。それと同時に、他教科の科目においてこのような国語科の領域で学習した内容を活かすには、課題がある事が分かった。

#### 5. 考察

各章の事前と事後のテストにおいて、「順序立てた説明」や「筋道立てた説明」を行うことができる児童の人数が増加したことから、最終パフォーマンスとして説明文の作成課題を導入し、その活動に向け学習した知識を活用するような説明機会を充実させることは「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」の技能の育成に有効であると考えられた。また、第3章の結果より、筋道立てて考える力の育成において、学習の観点として活用した「根拠・理由・主張」の三点セットは、情報を基に考えを整理し、構成する表現の技能に効果的であると推測された。また、第4章では、他教科における児童が考えを説明する機会の充実を図るとともに声掛けによる意識付けをおこなったところ、児童の記述の内容に資料を用いた説明をすることができる児童の人数が増加し、内容としての充実が見られた。このことより、国語科を中心とした言語活動を充実させるためには、他教科においても継続して指導を行い、資質・能力に着目して教科横断的な視点で指導を図ることが重要であると考えられた。

#### 6. 今後の課題

本研究の課題は、「根拠・理由・主張」の三つの観点の定着である。テストの記述より、児童が三点の意味理解や観点ごとに内容を整理しているか把握を行うことが出来ていなかった。そのため、それらに対応する調査方法や全教科での指導の在り方を考えていきたい。